

# 圓乘院宣明講師の遺風

上杉文秀

## 緒言

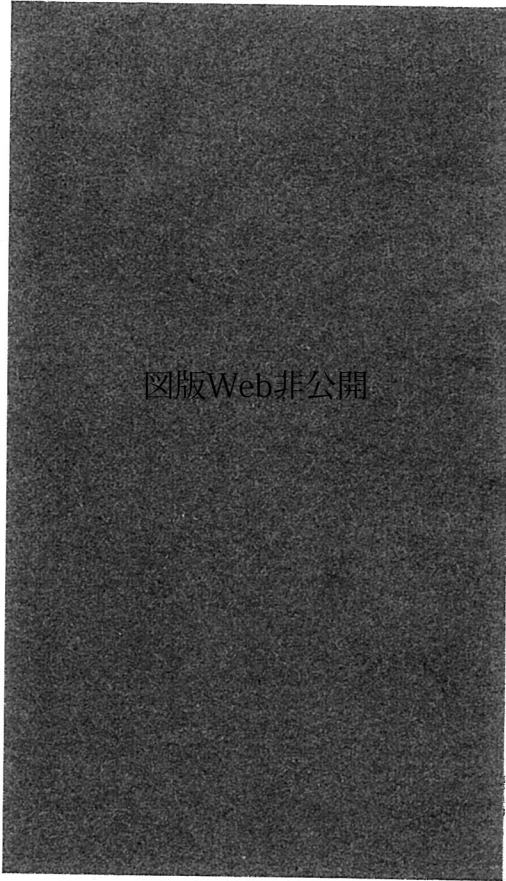
學報編集員より研究號を發行するから圓乘院師に就いて知る所を記せよといふことであつた、承諾はしたががきて如何なることを書かんか、先輩の學風を批判するなどは後學としては以ての外のことであるし、傳記や著作は田舎生活の予が物せずとも史料編纂の方で出来ることである、筆執るに當りて甚迷ふた、因て予の記すべき項目の指示を求めた、委員の示す所尤も體を得たりとも思はる、されど前にいふが如きものもあり、且つ予の爲し能はざることもあり、逡巡遷延空しく今日に迫んだ、されど前に約する所あり果さざるべからずとは予の性格なれば、期限の既に迫りたる、若し今一兩日を過さば予は他の事に當面せざるべからざるとによりて、定めたる腹案もなく卒かに原稿紙に對つた、即ち筆を題目に下さんとして乍ち臺端に現れたるものは遺風の二文字である、大に得たる心地しつゝ先づこの緒言を記す、予は元より圓乘院師を善く知るといふものではない、亦その學流を抱むものでもない、又學系が繫屬して居るといふでもない、委員の人から圓乘院師を予に割り當てゝ依頼し來つたのは恐くは眞宗大系の内に師の講説を予の校正したるものが割合に多いからであらう。その外は予が師の學事に關する記述を發表する資格もなく、調査し置いたこともない。さればその講録を少しでも多く讀んだといふ意義に於て、予の景慕する學的遺風を無論感想的に書かしてもらふことにした。

一、傳記 は大谷派講者列傳(眞宗全書)に碑文及肖像の贊等を載す、又講録の現存するものは『眞宗大系』の總目錄中に先輩講述目錄といふがある、それに載せられてある。

但し師は寛延三年三月五日加賀に生れ、天明七年越中高岡の開正寺を董す、文化八年二月講師職

に就き、文政四年五月十七日入寂せらる。時に年七十二。香月院深厲師は師とは一年の年長者、擬講も嗣講も同時拜命、講師は先きだつこと十八年、入寂も亦先きだつこと四年である。皆往院鳳嶺

圓乘院講師肖像 (註は故南條文雄博士)



公開Web版図

師は師と同年輩にて入寂は香月院師とは一年早く、圓乘院師よりは五年早かつた

## 二、學系 の事はこれも

同書の中に載せらる。これに就て予の見聞する所を記せば、大谷派の學頭職は惠空講師に始りて惠然、惠琳と相承け、この系統は實際の師弟關係であるが、香月院深厲師が同門の先輩たる惠徹講師在職五年の後を繼いで、講師職に陞られたのは、これは惠然門下の隨惠師より出でられたので惠琳講師とは師弟關係がなかつたやうである。それは惠琳講師の寺にて當時の古文書を見たど

き、深厲師を擬講に進めんとする京都よりの有力な推薦狀が残つてあつた。若し所謂師弟關係があるならば他人が敢て推薦しやうはずがない。そして圓乘院宣明師は正しく惠琳師の門下にして義陶師等と共に伊勢と京都との間を往來して、いつも隨身勉強して居られたと聞く、但し惠琳師棲身の西光寺には義陶師に關する文書は多くあつたが、圓乘院師に係かるものは餘り目に附かなかつた。併し學系のことは學風から推しても疑ふ餘地はない。尤も學系といふても學風及び學説までが全然固定的に傳襲して同じものといふではない。學説は研究の上に師と異つた獨創の見が開かれて行くかも知れぬ。されば學系といふのは學問の上の面命耳提の關係をいふので、學風は又その間に於ける自然の薰習力が他と異りて師と同じやうな色彩を帯び來らしむるをいふのである。されば學系は後世の社中といふやうなものである。社中制度は香月院師の頃から學事の盛なるに隨つて師弟關係が密接になつて學問ばかりでなく一身の振方までも指導を受くるに至つた。それは明治の初年まであつたが、學校教育の起るに隨つて自ら廢棄されて、今では全く根を絶ちて、それが學校中心の同窓といふものに代つたわけである。

又學風は學系の上の同一色彩ある所をいふので、易行院師の如きは香月院師の文字章句を苟且にせられざる點を繼いで、寧その方面を大成せられたる如き概あるは、學風の學系と一なる所で、又圓乘院師がその師理綱院の記事珠に於て取らざる所もあり、又理綱院師は『六要鈔補』を作つてそ

の謬れる點を補はんとせらる、即ち補は破の貌であるに對して、圓乘院師は何處までも『六要』の説を護らんとせらるゝ、これ或は學風の或る點に於て一致せざるものである。併しそれが學系を繼ぐ一つの反動なりとも見らるべきか、要は學說のある部分に於て師弟相異なる所あるより生ずるものであらう。無論學說なるものは情よりいへば、師弟相承けて一致すべきではあるが必ずしも盲従するものを善き弟子といふではない。却て師の缺くる所を補ひ、又その師說に反對することに因りて後學が啓發を受くるならば、その背くこと若しくは破することが、取りも直さず師承を公明にするともいはるゝ、これは長生院師のその師香月院に對する態度であつて、『御一代記聞書』の講義(眞宗全書)を披けば分ることである。圓乘院師のその師理綱院に對する態度も亦これであると思はる。

三、學風 惠然、惠琳の二師が漢文學の大なる素養と、博覽強記の資質とを以て、攻證該博、發揮明確なる跡を承けて、圓乘院師は義理の徹底に勤められしものと見ゆる。文字の訓詁及經論の典範等には、さまで深く心を用ひたる形迹なく、又和語の解釋に於ても、曾て人に對して、「素養の足らぬ和語説を以てたすけたまへを解釋すると和學者が笑ひまするぞ」と語られたと傳ふる。これは六要鈔を以て御本書を拜見し、御本書を以て御文を翫味せよといふ學風と知らるゝ。されば圓乘院師を承けたる開悟院師に於て、これと同一風格であることが思はるゝ。これは香月院師系と對照して明瞭に異なる色彩であると見られ、特に御文の研究に意を用ひられしやうに思はる。それは曾て惠

琳門下にあつての修養の結果であらう、惠琳師の記事珠は、江戸滞在中に成つたと傳ふれども、それは筆を執つて大成せられたことであつて、定て伊勢の自坊に常に御文の講席が開かれてあつたことと推せらるゝ。惠琳師は祖師を以て御文を解せんとせられた、宣明師は御文を以て祖師を解せんとせられたといふて見たいやうである。但しその御文と祖師との間に覺師存覺師をはなさずに行く所は惠琳師を傳へて更に委しい所ではなからうか。これを他から見居る皆往院鳳嶺師は、御文は御文學問といふがある、祖師と一致せしめんとのみすることは、更に考ふべきであるといふ風である。この邊が我一宗の安心學上に於ける各大家の學風の異りともいふべきであらう。

**四、學說**　こゝに於て自ら學說なるものが分れて、惠琳師にあつては信ずるとたのむと、そして稱ふるの一致を見出すことに盡くされたやうである。宣明師はたすけたまへと祖釋に求むるに勤めて執持抄より銘文に溯り、遂に發願配當説を主張せらるゝに至つたではないかと思ふ。これは安心學上の思想史といふことが關係するであらう、それは西の三業歸命、願生歸命の惑亂と、我明和の越後の三業意業の異計とが、多少の關係を有することであらう。末代無智御文の下を見ればそのことは分るやうである。記事珠にはたすけたまへと申さんを口業に解してあるのは、明和教誠の影響であらう。宣明師の發願配當は、たすけたまへの系統研究の結果であらう。そして三業惑亂後の信順裁斷の反動が、この圓乘院師のタスケ玉へとは極めて願ふ心なりといふを生み出したのではなから

うか。更に研究を要することである。圓乘院師の學説として今日最も尊むべき遺業は行信不離、機法不離の義脈を明にせられたことにて、終に御文の上に安心を示させらるゝ文段の全部を必ず六字六字を根抵とする二字四字、即ち南無歸命發願回向に配當して六字全く法にあり、六字全く機にあることを力説し、これによりて蓮如上人御一代の御勸化は、實にこの他力回向の信心なることを明確になされたといふことを主張せらるゝにある。然るに人動もすれば、發願配當説（タスケタマへは發願、タノムは歸命）に迷はされたものあるに懲りて、御文を六字に配當して、他力回向義を顯はす機法不離説までも棄てんとするは、所謂義ものに懲りて膾を吹くの風情にて、實に憫笑すべきことと思ふ。約言すれば、圓乘院師の學説の特點は、この御文を六字に配當することの眞に縦横自在なるにありと思はる。予はこの點を更に〱研尋して公明正大にしたいと思ふことである。

**五、異安心と學風** 文句の上の解釋を主とする學風には異安心は出ぬが、そのかはり平凡視される遺憾がある。義理の徹底を考へる學風には異安心が出る、そのかはりに奇抜だといふて喜ばれる。平凡も奇抜も駄評で取るに足らぬが、前者はたしかに初心を導くに必ずなけねばならぬ。後者は亦少し宗乘眼の開かれた人に喜ばれる。人動もすれば道念者の生ずるを前者の功果とし、異解者を以て後者の必然的副産物とするのは甚酷評であると思ふ。それは却て異解者に道念者があるのを見るから、異安心と道念との關係は、これは別に考へねばならぬ。とにかく文字學者には異安心は少く

て、義理系の方には異安心を誘發することの多いは事實である。タスケ玉へト申サンを理綱院師の口稱と解してもよいと許されてより、圓乘院師もそれを用ひ全く行信不離を論せらるゝにあるのが終に誤られて頓成の如き尤も偏僻頑強なる稱名正因を骨張せしむるに至つた。また圓乘院師のたすけたまへ發願配當の義門系は誤まれて是海の如き願を募りながらの法體安心になる。この發願配當説の異安心誘發に就ては、香山院師が與奪を以て辨釋し置かれたれば、今は迷ふものはない。又たすけたまへと申さんといふを口稱の申すに取りて行歸命に濫せんことは圓乘院師のいつもく懇ろに簡別せらるゝ所なれども、實に行信關係は一宗の肝要、安心學の全半を領するものなれば、深く注意すべきである。これに就ては予の見るところでは理綱院師の一枚起請文の『肯竅』が尤も要を盡して居ると思ふ。それは師自分にも明和の御教誡に關係しその結果は西本願寺からも批難を受けられ、その辯破もせられた種々の經驗もあるから、この行信論は大に研鑽されたものと見ゆる。圓乘院師はこの書を能く咀嚼して傳講されてゐるので、香月院師もこの肯竅の行信辨を讚歎して「よくこゝを解してこそ元祖の正意も顯はれ今家瀉瓶の正脈もあらはるゝなり」と申された。このこと予の『法然上人念佛義』一四〇頁に載せ置きたり。この『肯竅』は是非刊行したいものといふことを西弘寺の伊東惠研君に囑して置いたが其人今や亡し、後繼の方に更に願ひたきものである。猶この『肯竅』は當時人の見んことを争ひ求めたものと見へて、易行院師は遙に書を遺族者に寄せて借

覽を望まれた事實が、直筆の書狀に今も猶西弘寺の書庫に存して居る。以てこの肯窾の價値が卜せらるゝことである。

又圓乘院師の正信偈の錄(眞宗大系)には文軌の説を紹介して、歸命無量壽如來南無不可思議光といふも只音讀にしては、いろはにはへとど同じで何の事やら分らぬけれど無量壽の一如より來生して

公開Web版図

圓乘院師講壺蹟

南無不可思議  
光と成りたま  
へるに歸命し  
たてまつると  
讀むと分る。  
無量壽の一如  
は法性法身、

それより來生した南無不可思議光は方便法身、理法身と無法身とは論註に異にして分つべからずとあるからは、彌陀は無始無終であるといふ、これは文軌の私ではない、眞佛土卷の六要に出て居る。「此義イヤといはれぬこゝらが學問だ」といふてある。これが圓乘院師の後學を勵ます實に痛快な所である。けれどもこれは素人が取り誤りそうな所で危険である。異安心誘致はこゝの處である、無



論圓乘院師はこの説を用ひては居られぬ、たゞ研究心をそゝり起すまでのことである。それ故に自分の決擇は、次の處に唯信文意を引いて、「猶眞佛土卷に廣く經論釋を引いて決判したまへる、有始無終の報身如來と心を据へて拜見すべし、先輩よりしばし申傳へた趣なり」といふてある。これに就いて圓乘院師の講辨は餘程快辨であつたと見ゆ。また自分の講録は僅に大要を漢文で書いて置いて、それを縦横無盡に辯述せられたものと考へらる。それ故に筆記者の頭の鋭敏なものと迂愚なものによりて、その筆録に大なる相違がある。餘程注意して讀まぬと、一力樓上の由良サンを見て、千古の義士を訛り評するやうな事が出來する。予はこの經驗があるから、眞宗大系の刊行には自分から進んで校正の任に當らうといふたのである。それが今度禍を爲してこの學事史研究號に圓乘院師のことを書くと依囑せられ、然るべき蘊蓄もなく思考もなきに愠に筆を執つて、圓乘院師の高徳を汚瀆したことは如何にして謝すべきかである。今や筆を擱くに當て衷心苦惱する所である。されこれより更に意を此に置きて研尋の日を重ね領下の驪珠を探り大に法寶を諸友の前に呈露せんことを期する所である。故冷香院常にいふ、香月院師の講説は波間の魚を見るが如し、圓乘院師の筆録は海底の珠を探るが如しと、これは魚と珠とに喩へて褒貶の意を諷したのではない。その一は措辭整然として文理引證自ら次第あり、而かも初學をして分り易く諄々教へて倦まざる底の處、之を讀めば何人も領會せぬものはない、その心得易きを波間の魚を觀るに喩へたのと、他は萬里の波濤

の打寄する大海原に向ひて、若し氣弱きものならば海霧茫々たるを見て直に踵を回らすのみなれども、利根の人であらば淵に身を躍らして驪龍の珠を探り得んといふ趣を道破せられたものと感じて居る。されば前法主臺下のこの兩師の百回忌に贈らせられたと承はる玉什に「聖教に亞ぐべき偉業春麗らゝ」(香月院師へ)と「梅のごとまなこ義門に徹底す」(圓乘院師へ)とのたまひしは、實に兩師の學風とその後學の依るべき各々の特色を示されたものと窺はるゝ。予はこの兩師に對立して更に宗學の上に尤も吾人を啓發せしめらるゝは皆往院鳳嶺師であることを思ふ。その香月院師が聖教の局面を重んぜらるゝ所と、圓乘院師の義理の脈絡を主とせらるゝとに對して、師は尤も常識の判斷に訴へることを大切にせられたやうである。字句の解釋にあつても義理の分齊に於ても決して牽強附會の感じを起したことはないのは、常に師の遺録を讀去讀來する際に、適切に思はしめらるゝ。是れ後學の尤も指南とすべき所。それなればこそ琢如上人の高倉學寮をお開き下されてより今日に至る、幾多の碩學輩出せられたりといふも、香月院師、圓乘院師に次いでこの皆往院師を加へて、三講師の學系の外には更に出でぬといふことは、以てその卓絶したる智識と精練されし道念との如何に廣大なりしかを欽仰せしめらる。所論未だ盡きざれども且く筆を此に擱く。

(昭和三年六月二十六日松風窟に於て)

## 六、追記

近時は教權とか傳習とかいふことを知るも知らぬも皆用ひて賸々いひたて書き立てる

となれど、予輩は教權なる意義がその原語に於て如何に用ひられてあるか、知らざる所なれども、我一家に於いて若しそれがありとすれば、予輩は思ふ、教權は三經七祖の教語及宗祖列祖の著作に顯れたる教語に絶對の權威を有せしむることゝ。それに就いて蓮如上人は「聖教は句面の如く心得べし、その上にて師傳口業はあるべきなり、私に會釋すること然るべからざる事なり」と仰せられて、何人にも眼に文字さへあれば如何なる難解の聖教なりとも讀下すことは出來得る。されどそれは素人讀みのことにて、哲學は哲學、宗教は宗教、殊に印度支那より日本に來つて實に千四百の年處を累ねて居る。さればその發達したる徑路には各必用に應じて制定せられたる術語もあつて、それは如何にしてもその圈内に入らねばその眞意義は分りはせぬ。予輩が財團の會に列席して居ても、はや寄附行爲といふ語を文字のまゝに解して、お寺へでも金を上げることのやうに思ふたらば如何であらう。予輩は今猶分らぬがそうではないそうな、若しそれを知らんとするならば就て講釋を聞かねばならぬ。こゝに講釋師が入る。我真宗教義にも一宗を統御したまふ法主を輔佐する講師があるから、それに就て傳授を受けるを師傳と名くる。それも別に祕傳の口傳のといふ祕密事ではないけれども、聖教に顯れたる文字の外ならずとも、それは何事でもあること、即ち湊合分解や歸納續釋、それが歴史を古くするほど先輩の研究の結晶となつてあるから、それが甲より乙へ、乙は甲に繼いで、或は補ひて、勿論その間には蛇足もあり訛誤もあれど、更に乙丙丁と次第に洗練し行

くのが亦是一種の師傳口業といふものである。それを屈膝して師傳を被ふるといふことを厭ふ未得謂得の増上慢は、たゞ分らぬながらに自己の臆度に任せ、會釋し行かんとするが、抑々背師自立といふことの第一歩である。それも反省心の強き人ならば己に克つて元の道へと還ることも成り得れども、反省の氣分に薄くして改むる機縁のなきのみならず、一たび公衆に發表することのあるによりて、更に我慢と名利とが伴ひ來つて、最早抜くべからざる異安心といふ深窞に陥入することである。この處に最も必要なるものは善友と善師とである。而かもそれに親近することが尤も大切であることを知らねばならぬ。予の恩師は曰く、たとひ珍らしきことを思ひ附いても、先輩の中に一人にても既にその義をいふて居らるゝ人があつたならば、安心して發表するがよい、自分以外に誰人もいはぬことならば、或は危険であるといふことを心附かねばならぬ。予は常にこの語を守つて先づ今日までは大なる過誤仕出でもせず、自分も心中疚しからずあることを喜ぶ。無論宗學の研究は宗祖列祖の教語を如何に解領するかにあることにて、それも予輩は既に心得たりなどあるべきではない。酌めども盡きぬ無盡の法海なることを知らば、教語をさしをきて他面を顧るの餘裕はなきものど知らねばならぬ。前に擧げたる御文のたすけたまへと申さんである語の如き、理綱院師、圓乘院師は前にいふが如し、こゝに香月院師は改悔文の申さんの語は手仁波の助語なれども、御文のたすけたまへと申さんの申すは請願ふことなりと辨せらる。これ予輩のいつも不審に思ふ所、動も

すれば能歸を慕るものゝ爲めに誤らるゝことなきかと。かくて香月院師の愛弟たりし威廣院師の錄（眞宗大系）を見るに、「これは佛たすけたまへどたのみ申さんの中略と見ても差支なし」とあつた。予はこゝに至つて欣喜雀躍これあるかな〜と感歎の氣深くその後も更に考察を累ぬるに及びて、助けたまへと申さんとある御文に限りて必ず前後にたのむといふ語のあるに氣付き、又前にたのむの語のなきときは必ず助けたまへどたのむとか信するとかの語あるに定れるを知る。即ち五帖目初通は、その問題の本源、それを同五帖目三通、四通、六通等に照し合すれば、これは行文の都合にてたのむの語を略したまふまでのことにて、やはり申すの語はたのむの語がなくとも手仁波助語として見ることの決して妥當を缺ぐものにあらざるを覺へた。こゝに於て思ふに威廣院師はその嚴師の學説を直接に斥けるに堪へずして、それを傳習の儘に用ひながら、こゝに自己の考を漏らして知己を後世に待たれたものであらう。その穩健の態度は吾人の従ひ學ぶべきであると信する。そしてその餘意として殘し置かれた自説は、今日までに或は用ひたる人もあらんかなれど、予輩は初めてこの説に値ひたることにて既に先輩にこの説ありとすれば口上に申すの、或は意に請願ふのといふ、或は心得誤を生じ易き説よりも濫れものゝなきこの威廣院師の説に従はんとするの肚を決めたことである。但しそれとても又如何なる點に過失あらんも料り難し。更に諸彦の批評を乞ふことに憚るものではない。されば先輩の學説には取捨することあるは後學に與へられたる自由であると同時に

に宗祖列祖の教語には決して違背する如きはあるべきでない。この意味に於て教權と唱ふることに、研究の自由といふことを料簡して置きたい。この外に高倉相承とかいふべき別個の祕事祕傳口説のあるべきではない。たゞ今日までに研究せられたる先輩の學道上心血の結晶たるものゝあることを忘れてはならぬ。それは多分は宗學といふ上に常識となつて居るのである。只その常識となつてあるものに向つて、その内容の研究が宗學の蘊奥を極めるといふものである。以上聯想に任せて餘談を附記し、兼て意底に潜め置きし一片を披露し、以て學友の批判を仰がんとすることである。